

# Message

## 館長からのメッセージ

図書館長 深澤 良彰



## 「大きな」図書館の実現 ～早慶図書館システム共同運用実現の真の意味～

一昨年度のこの年報で、「良い」図書館とは何であり、それは何によって計測されるかということを書いた。いわゆる「メトリクス論」である。

この時には、所蔵する資料数は明らかにその一つであるとした。早稲田大学図書館の所蔵資料数は約580万冊である(2017年3月31日現在)。これを、利用者数(教員数+学生数)約5.87万人(教員数は2017年4月1日、学生数は同5月1日現在)で割ってみると、利用者1人あたり約100冊ということとなる。

仮に、利用者数5000人で所蔵資料数50万冊のA大学図書館があったとしよう。1学年あたりの学生が1000人程の規模の大学は、世界中にも、日本中にも、数多く存在するものの、この規模の大学で、所蔵資料数50万冊というのは、誇って良いと思う。このA大学も、利用者1人あたり100冊で、早稲田大学と同じである。では、このA大学図書館と早稲田大学図書館は、どちらが「良い」図書館であろうか？ 明らかに早稲田大学図書館の方が魅力的である。資料の網羅性が全く異なるからである。

早稲田大学図書館よりも、遥かに魅力的な図書館も想定できる。それは、所蔵資料数1000万冊、利用者数5万人のB大学である。利用者1人あたり200冊である。しかし、早稲田大学図書館として、これを実現するためには、これまでの130年ほどの早稲田大学の歴史の中で営々と蓄積してきたのとはほぼ同じ冊数を一気に購入しなければならず、不可能に近い。仮に金銭的に何とかなったとしても、実際の選書ができないであろう。

では、このB大学より劣るものの所蔵資料数1000万冊、学生数10万人のC大学を想定することはどうであろうか？ やはり学生1人あたり100冊である。このC大学は、選書さえきちんと行われていれば、今の早稲田大学図書館よりも遥かに魅力的であろう。

今、早慶で共同して図書館システムを運用しようという試みが進んできている。

このために、両大学でこの方向での合意をし、協力して提案依頼書(RFP: Request for Proposal)を作り、これ

を最も満足するシステムとして、Ex Libris社のクラウド型図書館システムAlmaおよび紙媒体と電子媒体を統合的に検索できるディスカバリーサービスプラットフォームPrimo VEを選定し、これを用いた運用の詳細を詰めているというのが、現段階までである。今後、実際にシステムに、さまざまなデータを流し込んでのテストを重ね、実運用という段階に進んでいくことが想定されており、これらが順調に進むことを願っている。

特にこのAlmaとPrimo VEの採用によって、これまで別々に検索を行わなければならなかった書籍に代表される紙の情報、電子ジャーナルに代表される電子の情報、Webに代表されるインターネット上の情報がまとめて検索できるようになることは、利用者に対して、大きな便宜を提供できるようになることが期待される。

昨年度のこの年報に、「次の世代の蔵書検索システムのあるべき姿」というタイトルの巻頭言を書いた。この時に書いた内容の多くが、早慶という歴史ある私立大学の図書館の中で実現することは大きな意味をもっている。

この共同運用の実現がもつ最大の利点は、早稲田がもつ580万冊、慶應がもつ490万冊を合わせて、1000万冊以上の所蔵冊数をもつ図書館が仮想的に実現されるということである。利用者数で言えば、早稲田の約5万8千人、慶應の約3万8千人を合わせた約9万6千人の利用者をもつ仮想的な大学図書館が実現される。この早慶による仮想的な図書館は、前記のC大学よりも、「より良い」図書館である。特に、この早慶仮想図書館が優れていることは、これまでの長い歴史の中で、優れた選書能力をもった多くの図書館職員によって選ばれた蔵書から構成されていることである。

『早慶戦』という言葉に代表されるように、早慶というと戦うことが義務付けられている。ちなみに、「2017年総長招待早慶戦優勝部祝賀会」での報告によれば、2017年、体育各部44部のうち、早慶戦を実施している39部の各部門において、早稲田大学の43勝1分13敗であったそうである。これだけ多くの『早慶戦』が行われている。これ以外にも、地方の校友会などにいってみると、ゴルフから麻雀までさまざまな『早慶戦』が行われていることに驚かされる。こんな中、世界的には実例があるものの、我が国としては初めての図書館システムの共同利用が、この早慶両大学の間で実現されようとしていることは、長い早慶の歴史の中でも、画期的なことである。

しかし、全く異なる二つの大規模な大学図書館を一つのシステムを用いて統一していくことは決して容易ではない。2019年夏のキックオフに向けて、これからも、いろいろな困難に直面すると思う。そんな時には、両図書館職員の英知と熱情によって、なんとか乗り切ってほしい。両大学の図書館は十分にその能力をもっている。

私に対して想定されている任期は4年。多分、来年度の年報の巻頭言は、新しい図書館長がお書きになるものと思う。これまでの巻頭言を総括するとともに、『大学図書館が一大学の中に閉じ籠っている時代は終わった！』ということを高らかに宣言して、言を結びたい。